

# 新・瘠我慢の説

経済学者  
渡辺利夫

## 【新連載】第三回 指導者の出処進退について

福澤諭吉は、明治二十四年の秋、徳川藩が移封された駿府城すんぷに向け東海道を下り、清水港近くの興津清見寺おきつせいけんじに立ち寄った。福澤が米国に渡った時の幕府艦船が威臨丸かんりんまるである。威臨丸は、その後、奥羽越列藩同盟おううえつれつはんどうめいの支援に向かう八隻からなる榎本武揚艦隊たけあきの一員として東北、北海道へと向かわんとしたものの、暴風に襲われて艦隊から離脱した。威臨丸はなおも幕府艦船として使われていたが、清水港に停泊中、官軍の攻撃にさらされ、船員七名が殺害された。官軍の目をはばかりて死者を葬る者は誰もいない。みかねた駿河の俠客・清

水次郎長じろちやうが手下を使って死者を船から引き出し、清水港に近い興津清見寺にねんごろに埋葬したという。その十七回忌に清見寺境内けいだいに「威臨丸殉難諸子記念碑」が建立されたことを福澤は伝え聞き、ここに立ち寄ったのである。

碑に向かい手を合わせてから碑の後ろに回ると、そこには「人の食を食む者は人の事に死すと刻まれ、揮毫したものの名前が「從二位榎本武揚」と彫られているではないか。何とあの榎本が、徳川家の幕臣として仕え禄を食んだ者は徳川家のため死すべきだ」という趣旨の碑文を書こうとは。

福澤は怒りに満身震える思いであつた。

榎本は、長崎海軍伝習所、オランダ留学を経て海軍副総裁、戊辰戦争では軍艦を率いて箱館に入港、蝦夷地政府を樹立するも、降伏、禁固刑となつた。しかし、間もなく特旨により赦免、北海道開拓使に任じられた。以降、海軍中将、ロシア公使、外務大臣、海軍卿、通信大臣、文部大臣、外務大臣などの要職を経て、明治四十一年に死去。享年七十二。まことに煌びやかな人生であつた。

惨たる敗北を喫しながら官軍への投降を拒否して戦死した多くの兵士をそのままに、みずからは拘束、禁固刑に処せられたものの、明治新政府による重用を受けて名声をほしいままにしてきた人物が榎本ではないか。そういう者が、後世に遺る石碑にそんなことを刻みつけていいはずがない。怒気を含んだ気分を福澤は収めることができず、東京三田の自宅に踵を返し、一気に認めたものが「瘠我慢之説」である。榎本の出処進退について福澤はこういう。

「凡そ何事に限らず大挙してその首領の地位に在る者は、成敗共に責に任じて決して之を遁るべからず。成ればその榮譽を専らにし、敗すればその苦難に當るとの主義を明にするは、士流社会の風況上に大切なることなるべし。即ちこれ我輩が榎本氏の出処に就き所望の一点にして、独り氏の一身の爲めのみならず、国家百年の謀に於て士風、消長の爲めに軽々看過すべからざる所のものなり」

福澤は、戦いに勝てばその榮譽を受けてもいいが、敗退したものはその責を負うべきであり、敗退の後は苦難の道を歩まざるを得ない。当然のことではないか。かつて武士として生きた人間であれば、これは主義として擁していなければならぬことだ。榎本は戦いに敗れ、あまつさえ脱走に失敗して捕えられたのである。このことは氏の「政治上の死」を意味する。政界で再生を図ろうというのは何ごとか、という。福澤は返す刀で、かねてその出処進退の在り方に懸念を抱いていた勝海舟を切りつけるのだが、このことについては次回にまわそ

う。

「人の食を食む者は人の事に死す」とは封建の忠君の義に他ならない。榎本もそのような趣旨でこの碑文を書いたのにちがいない。しかし、榎本の実際の行動はその趣旨とは真逆のものだ、というのが福澤の判断であった。『学問のすゝめ』により啓蒙主義者として頭角を現した福澤も、その言説の表層を剝がして中身をのぞきみれば、氏は大いなる忠君愛国の精神の持ち主であったといふべきであろう。

瘠我慢の一義を遺憾なく發揮した事例として福澤が最も重視したものが、徳川家康をして幕府の開祖たらしめた三河武士の忠義であったとして、次のようにいう。

「理にも非にも唯徳川家の主公あるを知て他を見ず、如何なる悲運に際して辛苦を嘗るも曾て落胆することなく、家の為め主公の為めとあれば必敗必死を眼前に見て尚お雄進するの一事は三河武士全体の特色、徳川家の家風なるが如し。是即ち宗

祖家康公が小身より起りて四方を經營し遂に天下の大権を掌握したる所以にして、その家の開運は瘠我慢の賜なりと云うべし」

榎本の政治的能力は相当に高いものであったにちがいない。発足して間もない明治新政府にとって榎本は不可欠の人物だとみなされたのであろう。しかし、福澤の倫理・道徳はこれを許さない。かかる出処進退を認めてしまえば、新国家を支える精神の根本が崩れ去ってしまうではないか。福澤の悲痛な叫びであろう。

日本人は第二次大戦において余儀なくされた戦争を果敢に戦い、これに敗れた。だが敗北後の日本のジャーナリズムやアカデミズムのリーダーたちは、征服者GHQ製の憲法と東京裁判史観をおしただき、のみならずこの憲法と史観の推進者へと反転していった。

この反転のいかがわしさを明らかにしたものが、渡部昇一教授や小堀桂一郎教授によって「再発見」された、一九五一年五月のマッカーサーによる米上

院軍事外交委員会での次の証言であった。

「日本は八千万に近い膨大な人口を抱え、それが四つの島の中にひしめいているのだということを知り解していただかなくてはなりません。その半分の農業人口で、後の半分が工業生産に従事していました。潜在的に、日本の擁する労働力は、量的にも質的にも、私がこれまでに接したいずれにも劣らぬ優秀なものです。歴史上のどの時点においてもか、日本の労働者は、人間は怠<sup>なま</sup>けておるときよりも、働き、生産しているときのほうがより幸福なものだということ、つまり労働の尊厳と呼んでいいものを発見していったのです。

これほど巨大な労働能力を持っているということは、彼らには働くための材料が必要だということとを意味します。彼らは工場を建設し、労働力を有していました。しかし、彼らは手を加えるべき原料を得ることができませんでした。日本は、絹産業以外には、固有の産物がほとんど何もないのです。彼らは綿がない、羊毛がない、石油の産出

がない、錫<sup>すず</sup>がない、ゴムがない、その他実に多くの原料が欠如している。そしてそれら一切のものがアジアの海域には存在していたのです。もしこれらの原料の供給を断ち切られたら、一千万から一千二百万の失業者が発生するであろうことを彼らは恐れていました。したがって、彼らが戦争に飛び込んでいった動機は、大部分が安全保障の必要に迫られたことだったのです」

日本の戦争が自衛戦争であったことをこれほどあからさまに表現した最高責任者の発言は他にない。福澤が存命であれば、G H Q に唯唯<sup>いさか</sup>諾諾<sup>だく</sup>たる戦後の日本のリーダーをみて、日本には瘠我慢<sup>せうがまん</sup>の一義<sup>いちぎ</sup>がかけらも残っていないのかと憤怒<sup>かんぬ</sup>の一文<sup>いちぶん</sup>を草<sup>くさ</sup>したにちがいない。

#### わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長を歴任。八五年、「成長のアジア 俾浦のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大金正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・大正洋行大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。